

講演

「私の考えるこれからのロータリー」



パストガバナー（横浜RC） 上野 孝

本日は皆様の地区大会の貴重なお時間を頂きまして、「私の考えるこれからのロータリー」というタイトルでお話をさせていただく機会をいただきましたこと心より感謝申し上げます。（月信編集係 中略）

今年の国際協議会におきましては、例年と異なり100周年ガバナーの研修を図ることから大変盛り上がった協議会でありました。そのときに、「ロータリーを祝おう」という今年度のテーマが発表になったのでありますが、これにつきましては当然色々な解釈をされる方がおられました。

日本のガバナーエレクトの中には、『今会員の減少が続いている中で、「お祝いする」という気には中々なれない。地区に帰ってどういう説明をしたら良いか分からず困っている。』ということをおっしゃる方もおられました。国際協議会でお会いした韓国のトレーニング・リーダーの方は、「韓国語の「Celebrate」の訳語は単に『お祭りで騒ぐ』という意味しかない。「Celebrate」という英語の意味は「過去を称賛し未来につなげる」というもっと広い意味があるのではないかと。これをどのように解釈し、説明したら良いか、大変難しいと感じている。」というお話を伺いました。「Celebrate」という言葉を辞書で引いて見ますと、単に「お祝いする」ということではなく、「業績を称賛する」という意味があるということが出ております。日本語においても「お祝い」という言葉の中に「過去の業績を称賛する」といったような広がりがあるのか、それとも単に「お祝い」ということだけの意味しかないのか私にも分からないのでありますが、「お祝いする」というところに止まらず、もう一步深いところにおいてテーマの解釈をする必要があるのではないかと考えています。

そのことに関して、エステス会長は次のように、言っ

ておられます。「100年続く組織はまれです。ロータリーがこの重要な節目にたどり着いたことは、ロータリーの奉仕に対する需要が極めて大きいことの証です。将来に目を向けながら、これまでの実績を回顧するのは正しいことですが、上手くできた仕事について、ただ自分たちを褒め称えるのが目的ではありません。そうではなく、過去から受ける刺激が、奉仕の第二世紀の挑戦事項に立ち向かう私たちを支えてくれるからなのです。」

またビチャイ・ラタクル元会長はこの点に関して、次のように述べております。

「100周年はただ過去を振り返るときではありません。現在を見直すときでもあります。今日私たちがどこにいるのか、今何をしているか、そして正しい方向に向かっているかを、検討するときです。100周年は、将来について考え、新しい目標を設定し、新しい挑戦事項に立ち向かうときです。」

従いまして、ロータリーとしてこの機会を、単に100周年のお祭りの機会にするのでは無く、「過去の業績を顧みて、今日あるロータリーの立脚するところを確認し、次の百年に向かっての発展の基礎とすることが「祝う」「Celebrate」の意味である」という点を理解することが重要であると考えております。

そのような気持ちもございまして私は今日お話をさせていただきますテーマを「私の考えるこれからのロータリー」とさせていただきますように次第でございます。

(1) 「今ロータリーはどのような方向に向かおうとしているか？」

「これからのロータリー」ということを考えるに際しましてここ数年間国際ロータリーがどのような

ことを目指してきたのか、そして100周年を迎えてどのような方向に向かおうとしているのかについて考えてみたいと思うのであります、それを検証する方法には色々なやり方があるとおもいます。規定審議会の結果を分析するとか、理事会の決定事項を検討するという方法もあると思いますが、最も手取り早い方法は歴代のRI会長が何を最重要としてロータリーを運営しようとしてきたのかということを考えることではないかと思えます。

私がガバナー・エレクトとして国際協議会に伺いましたときは、リチャード・キングという方がRI会長エレクトでありました。その次の年度の会長はタイ出身のビチャイ・ラタクル会長でありました。その次の年度はアフリカ大陸出身で初めての会長となられたジョナサン・マジアベ氏でありました。

私はガバナー・エレクトやガバナーまたRIの研修リーダーとしてこの三方がRIをどういう方向にリードしていこうとされたかまたいこうとされているのかについて、いろいろな機会に直接お話を伺うことができました。

話を単純化するために過去三代の会長が何を最優先のミッションとして考えてきたのかということを考えてみますと、次のように要約できるのではないかと思います。

各会長の最優先ロータリー・ミッション

キング会長 (2001~02)	会員増強優先と財団の寄付増進がロータリーのミッション
ラタクル会長 (2002~03)	クラブがロータリーの核心、職業奉仕を再評価
マジアベ会長 (2003~04)	貧困の救済がロータリーミッション

これはあまりに単純化したものの言い方でございますので、お三方から叱られるかもしれませんが、それにいたしましても、毎年会長が変わることによってこれだけRIの方針が大きく揺れ動くことは、ロータリーという大変大きな組織にとって果たして好ましいことだといえるのだろうか？・・・特にクラブレベルの草の根ロータリアンとしてこれだけ毎年変化するRIの方針をうまく受け止めることが出来るのだろうか？という疑問を感じました。

ここ三代の会長が我々に示されているロータリー

のミッション、奉仕分野別の最優先事項また特にガバナーに要請されているリーダーシップ・スタイルもその年その年によって大きく異なるのであります。そこにはいかなる継続性を見出す事も困難であります。ましてやその背後にロータリーとして持つべき一貫した哲学を感じる事は至難の業であります。

その結果としてクラブやクラブ会員がどのようなロータリーに対するヴィジョンを持つべきかを明確にすることが出来ないままに毎年が過ぎて行くという結果になってしまっているのではないかと感ずるのであります。

(2) ビチャイ・ラタクル会長の指摘ーロータリーの強み・弱み

昨年4月、当時のビチャイ・ラタクルRI会長が来日をされて全国のロータリアンと意見交換をする機会をもたれました。私も4月21日東京におけるビチャイ・ラタクル会長の講演を伺う機会を得ました。その節のお話の中で、会長は、現在のロータリーの持つ強い点と弱点ということについて触れられました。ロータリーの強い点とは、ポリオ撲滅を始めとして、世界のあらゆるところで素晴らしい奉仕活動を展開しているところである。

それではロータリーの弱点とは何かということですが、それは第一に継続性の欠如と言うこと、第二にはロータリーがロータリーの哲学を忘却してしまったことであるということでありました。

現役のRI会長がロータリーの弱点ということに言及されたのでありますから大変勇気のいる発言であったのではないかと思います、そこに居合わせたロータリアンは非常に強い関心を持って会長のスピーチを伺ったのであります。私も会長のお話に強い共感を覚えた一人でありました。

このように過去三年間だけを見てみましても、RI会長が交代される度に国際ロータリーの方針が大きく揺れ動いているように感じます。

ビチャイ・ラタクル会長がいみじくも指摘をされました通りそこにはロータリーの継続性という事にはあまり配慮が成されていないように感じるのであります。更に継続性がないがために、そのRI会長が持つロータリーのヴィジョンがその人がRI会長である限りにおいては組織の中で強調されるけれども、次の会長になれば全く違ったものが強調されるという事の繰り返しの中で、ロータリーの本来持つ根本のヴィジョンが次第に忘れ去られてしまっていてい

るというのがロータリーの今の状態であるといえるのではないかと思うのであります。すなわち継続性の欠如はロータリーの本来のヴィジョンというか哲学の忘却という事を生んでいるという事もいえるのであります。

ピチャイ会長の言われる「継続性の欠如」と「ロータリー哲学」の不在は別のものではなく、表裏一体のものであると考えられるのであります。

それでは、ロータリーが現在抱える弱点克服のために重要と思われる考え方四点について述べさせていただきます。

(3) ロータリーの弱点克服に向けて

それは

第一はロータリーの本質の明確化

第二には新しい職業奉仕の考え方

第三にはロータリーの情操教育

第四には継続性の維持

ということであります。

①ロータリーの本質の明確化

第一点でありますロータリーの本質の明確化という点であります。それは端的に申し上げれば「職業奉仕団体としてのロータリー」ということをもっとはっきりとロータリーの内外において明確化しなければならないということであります。これは既に言い古されていることではあります。やはりいくら強調されても強調されすぎることのないほど重要な点を含んでおりますので私なりにこの点をお話申し上げたいと思います。

ロータリーがなぜ職業奉仕団体なのかという問いに対する答えは、「ロータリーの綱領」のなかにあります。「ロータリーの綱領」というとまず訳が分からないということが、先に立ちますが、これはロータリーの憲法とも言えるべきものなので、少しこのことについて説明させていただきたいと思っております。

「ロータリーの綱領」は「有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し・・・」とありますが、私はこれを少し拡大解釈になるかもしれませんが、「ロータリーの目的は自分の職業を倫理的、道徳的に高いものにしていくために奉仕の理想を学び、実践し、それを世の中に広めていくことにある。」

と解釈をいたしております。

なぜこのような解釈が成り立つのかをご理解いた

だくために、もしロータリーが職業奉仕団体ではなく社会奉仕団体、ボランティア団体であったとしたら、その綱領はどのように言い表されるであろうかということを考えてみたいと思っております。

それは多分「有益な事業を基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成することにある。」となるのではないかと思います。ここで、注目していただきたいことは「有益な事業の基礎として」という「の」と「有益な事業を基礎として」の「を」の違いであります。すなわち、ロータリーが社会奉仕団体、ボランティア団体であるとしたら「有益な事業を基礎として…」でありますので、「自分の立派な事業がすでに存在をしている。その基盤の上にたって、そこから得た財政的余裕、時間的余裕、社会的な地位等を活用して社会に役立つ奉仕を実践しよう」ということになるでございましょう。しかしながら本来のロータリーにおいては「有益な事業の基礎として」ということでもありますので、「自らの事業を有益なものにしていく、すなわち倫理的・道徳的に立派なものにしていくために、奉仕活動を実践する中で奉仕の理想を学びましょう」ということになるのであります。

ロータリーの奉仕活動は自らの事業を有益なものにしていく、即ち倫理的、道徳的に価値あるものとするために、奉仕の理想を学ぶ手段としてこれを行うのであります。

ロータリーが本来職業奉仕団体であって、単なる社会奉仕団体や、ボランティア団体ではないということがよく言われておりますが、「有益な事業の基礎として」と「有益な事業を基礎として」の「の」と「を」の違いを知ることが、ロータリーの本質を理解する上で小さいけれど大切な鍵となるのではないかと考えるのであります。

ロータリーの本質はその綱領が明らかにしておりますように、「ロータリーの目的は自分の職業を倫理的、道徳的に高いものにしていくために奉仕の理想を学び、実践し、それを世の中に広めていくことにある。」

という目的を持った職業奉仕団体であると考えることが出来ます。従いましてロータリーにとって「職業奉仕がなぜ最重要なのか」という疑問に対する答えとしては、「それがロータリーの本質である」からだということになると思っております。

②これからのロータリーにおける職業奉仕のありかた

ロータリーの本質であるべき職業奉仕が現代のロー

タリアンにとって非常に理解しにくい、具体的な職業奉仕活動といわれると何をして良いか分からないと良く言われます。それにはいくつかの理由があると思っております。

私が考えますのに、

I) 自らの職業的倫理観や道徳的水準を高めるといふ抽象的な考え方であり、他の具体的な奉仕に比較して理解されにくい。

II) よしんばそれを自分の職業や専門職の中で実践しようとしても目に見える成果をすぐ実感することができない。

III) 職業奉仕は、その根本においてまず自分の心の持ち方の問題であることから、クラブの活動のなかで広がりを持ちにくいのでクラブとしての活動として取り上げ難い。

というようなことが職業奉仕が難しいと言われる理由としてあげられるのではないかと思います。

ロータリーの本質である職業奉仕をより身近なものとするためのヒントとなるものが、1987年に出された「職業奉仕に関する声明」の中にあります。「職業奉仕に関する声明」には「職業奉仕の理想に本来こめられているものは次のものである。」として3点を挙げております。

I) あらゆる職業において最も高度の道徳的水準を守り、推進すること。(後略)

II) (前略) あらゆる有用な職業の社会に対する価値を認めること。

III) 自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てること。

第一の点の自らの職業や専門職上の倫理観の向上に関する具体的な活動としては、

- ・会員の事業所見学
- ・職業奉仕に関するグループ討議

などがあげられると思っております。

第二の点のあらゆる有用な職業の社会的価値を求めるといふことに関しては、

- ・社会を支えている様々な職業の人々の努力を顕彰する

というようなことが具体的に考えられます。

第三の点の自らの職業上の手腕を生かして社会的問題の解決に役立てるといふ職業奉仕の側面としては、

- ・青少年のための職業情報提供
- ・職業技能訓練の機会の提供
- ・障害者のための雇用機会の提供
- ・高齢者のための雇用機会の提供

などを具体的な活動としてあげることが出来ます。

これら3つの職業奉仕の側面のうちこのなかで第一点と第二点は伝統的に日本のロータリアンのなかでは特に重視されているように思っております。第三点の自らの職業上の手腕を生かして社会的問題の解決に役立てるといふ職業奉仕の側面に我々ももっと注目をしていくことが大切なのではないかと思うのであります。

最近世界銀行の副総裁であるJ・H・リシャルという人の書かれた本を読む機会があったのですが、リシャルによれば、今後20年間のうちに人類として対処しなければならない問題が大きく分けて三つあるということであります。

I) 地球温暖化などの人間の住む空気の物理的な限界に関わる問題

II) 貧困との戦い平和の維持、デジタル・デバイドなどグローバルな努力が必要な社会的、経済的な課題

III) 課税、金融システム、競争、移民などグローバルな規制が必要な問題

これらの問題解決のために国際機関、国際条約・協定、政府間協議やサミットなどは役に立たない。なぜならば、垂直的な権力代表プロセスと国民国家の正当性を掲げる既存の枠組みでは、専門家から一般市民まで衆知を集めるという点や、迅速に行動を起こさねばならないという点で、決定的に対応できない。発想を転換し、地球規模的な問題ごとに国境を越えたネットワークのような仕組みで補完しなければならない、ということをお話しております。

私はロータリーの「職業奉仕に関する声明」の第三点の考え方と国際ロータリーの持っている地球規模のネットワークを活用することによってロータリーはこのような問題の解決に対して、他の奉仕団体やボランティア団体と比べることのできない貢献をすることが可能であると考えております。

そのためには、ロータリアンとして「職業奉仕に関する声明」の第三点にもっともっと光をあて、もっと実際のなしかし人類の地球規模の問題を解決することに重点をおく職業奉仕を再構築していくことが必要なのではないかと思うのであります。

自らの職業、専門職における高い職業的倫理観や道徳観を高める事は職業奉仕として大切なことではあります。そこに職業奉仕の目標を止めるのではなく、世界で起こりつつある諸問題の具体的な問題解決にロータリーがもつ世界的ネットワークを活用し

つつ、ロータリアン夫々が持つ職業的技能、技術をもって積極的に参加していくことを、職業奉仕と定義し直す事が時代の要請であるように思うのであります。

たとえば環境問題はこれからの人類の生存を左右する問題であり開発途上国が石化エネルギーを爆発的な勢いで消費するような状況になったときに、資源の枯渇、温暖化により人類の生存は非常に危ういものになるのであります。この問題の解決にロータリアンが職業奉仕の考え方に立って高い職業倫理、道徳観を發揮して、環境に貢献するような行動を起こしていくことにより社会に大きな影響を与えることができ、ロータリアンの世界的なネットワークを動員することによって地球的規模の問題解決に資することができるのであります。

また、日本における少子高齢化社会の到来は、労働力としての移民受け入れを不可避なものとしております。労働厚生省の推計でも2050年までに1,000万人の外国人労働力が必要であり、多いときには年間60万人の移民が流入してくるということになります。このような事態において惹起される問題解決に対してロータリアンの職業奉仕の哲学が果たすべき役割は非常に大きいものがあるように思うのであります。

このように職業奉仕の考え方を再構築し、より具体的な、現在の環境にふさわしい職業奉仕についての哲学を確立し、ロータリアンの将来ビジョンの中心にそれを据えることによって、新たなロータリアンの再生を図ることが必要なのではないかと考えております。

③ロータリアンの情操教育

次に、会員教育の問題に触れさせていただきたいと思うのであります。私はロータリアンの本質について触れさせていただいた中で、「ロータリアンの目的は自分の職業を倫理的、道徳的に高いものにしていくために奉仕の理想を学び、実践し、それを世の中に広めていくことにある。」ということを申し上げさせていただきましたが、このようにロータリアンについて考えることが正しいとすれば、「ロータリアンの本質はまた教育にある」ということが言えるのではないかと考えております。

ロータリアンが現在低迷を続け100周年を迎えんとして将来に明るい展望を見出せない一つの理由として、ロータリアンの既存の会員に対しても新会員に対しても、情報教育が正しく行われていないということに原因

を求めることになるのではないかと考えております。

a. 知識のロータリアン情報教育

ロータリアン情報教育と申しますと「地区大会」「地区協議会」「IM」「クラブレベルにおける情報教育」など具体的なロータリアン情報教育の機会を思い浮かべるのであります。これは第一項に該当するものではないかと思っております。しかしもっと本質的なロータリアン情報教育に当たるものが第二項なのではないかと思っております。

「地区大会」「地区協議会」「IM」「クラブ・レベルにおける情報教育」などの本質はいわばロータリアンの知識に関する教育が主体であるということができると思っております。私はガバナー・エレクトにとって、国際協議会の事前の教育機会であるGETSの研修リーダーをさせていただきました時に、地区ガバナーのマニュアルの最初に次のようなことが述べられているのを読み大変驚いた経験がございます。

「哲学ではなく運営面に主眼をおく事によって、クラブおよび地区の指導者が、全てのクラブが効果的に機能し、四大奉仕を通じてロータリアンの綱領の積極的な実現を可能にする。」

しかしこれからのロータリアンの会員教育のビジョンを考えますときに本当にそのようなことでよいのかということに関して私は非常に疑問を持っております。

b. ロータリアン情報教育の二つの側面

ロータリアン情報教育について「手続要覧」を見ますと二つの定義があることが分かります。

1) ロータリアンの綱領、原則および発展と四大奉仕部門に関する会員の理解をはぐくむこと。

2) ロータリアンの一人一人がロータリアンの理想に自ら貢献し奉仕することにより、責任感と理解を養うこと。

このうち第一の点については無数の方法において実行がなされているのではないかと考えております。しかし第二の点については、あまり理解がされていないのではないかと考えております。

c. ロータリアン情操教育の必要性

会員教育はまず何をしても会員の職業的倫理観、職業人や専門職にあるものとしての道徳的価値観を育成するものでなくてはならないと思っております。いわばロータリアンの最も大切な心を教育するもの、それがロータリアンにおける会員育成の本質であると私は考えるのであります。したがってロータリアンは将来のビジョンを考えますときに会員の情報教育

とともに「ロータリアン情操教育」ということにもっと、力を注ぐことが必要ではないかと思っております。

それではロータリアン情操教育はいかなる方法を持って行われるのでありましょか？

それは主に例会と奉仕活動にあると考えられます。例会を通して、奉仕活動を通して、そこからロータリアンの本質である高い職業的倫理観、道徳的価値観すなわちロータリアンの心を身に付けていくと言う事になるのであります。

(I) 例会

例会がロータリアン情操教育の重要な機会であることには誰にも疑いのないところであります。それを理解するには「ロータリアンの例会は人生の道場である」という米山梅吉氏の言葉を引用するだけで十分であるように思っております。例会は自分と異なる職業や専門職に就く他の会員との切磋琢磨を通じて、また卓話などの機会を通じロータリアンの心を学ぶ場であり、会員教育にとっての最も重要な機会の一つであります。

私のクラブに数年前にキリスト教の牧師さんが入会をされました。しばらくして、その牧師さんが私のところにやってきてこう仰いました。「ロータリアンの例会と教会の礼拝は良く似ていますね。開会にあたって鐘を鳴らす。ロータリアンソングと賛美歌、ニコニコボックスと献金箱、卓話と牧師のお説教と並べてみるとほんとに良く似ていますね。」私はそのお話を聞いてその時そういうものかなと言うほどにしか思わなかったのであります。後でよく考えて見ますと、例会も教会も人間を作る、その方向は異なるかもしれませんが人間の修養の場という同じ目的を持っていることから自然にその形式も似たものになっていったのではないかと考えるようになりました。その形式から考えても例会は高度な職業的倫理観、道徳的価値観を持つ人を育成する場ではなければならないと思っております。

(II) 奉仕活動

次に奉仕活動が「ロータリアン情操教育」の場であるとはどのような事を意味するのでありましょか。例えば社会奉仕団体、ボランティア団体としてのロータリアンにおいて、会員が献血という奉仕活動を行った場合には、これは自分の立派な事業をベースにしてそこから得た財政的余裕、時間的余裕、社会的な地位等を活用して、献血活動に参加をし、それを社会のために役立てるといえることがその奉仕活動の目的となるのでありましょ。従って献血活動そのも

のが奉仕活動の最終目的となるのであります。

すべからくロータリアンの奉仕活動は、自分の職業上の倫理的、道徳的な側面を質的に高めていくという会員にとっての教育目的のための手段として行うべきものであります。したがっていかなる奉仕活動もロータリアンにおいては「ロータリアン情操教育」のために行われるのであると考えなければならないのであります。

ロータリアンの本質を学び、ロータリアンの理想を實踐していくための教育機会としての、例会、奉仕活動が果たすべき大変大切な役割を考え直すことが今こそ必要であるように感ずるのであります。例会の持つ本来の教育的意味、ロータリアンにおける奉仕活動の本質的な存在意義、本当に果たすべき役割を理解、認識することが大切であります。

④継続性の維持

a. 人事の単年度制

今ロータリアンが抱える二つの欠点を解決する方法として、継続性を重んずるという観点から、役職の単年度制を考え直すという動きも出ております。これはロータリアン本体というよりもむしろロータリアン財団に顕著に現れていることではございますが、地区の財団の委員長は3年間の任期が好ましいということになってきておりますし、またロータリアン財団のコーディネーターは2年から3年の任期に延長されました。

一年でクラブ会長はじめ役員が交代するという制度はポール・ハリスが提唱したものであるといわれており、ロータリアンの創設時に遡ることのできる組織の長期的維持発展のための知恵であるといえるのではないかと考えております。

従いましてロータリアンで全般的に維持されております単年度制を変えてしまうことはメリットよりも大きなデメリットを生むような感じがいたします。

b. 奉仕プロジェクトの単年度制

もっと多くのロータリアンが疑問を感じるののはなぜ奉仕活動も単年度が望ましいとされているのかという点であります。国際ロータリアンにおいては、ポリオ・プラスのように大変長い年月をかけなければ解決のつかない問題に取り組んでおりますが、クラブレベルになりますと単年度で終わるプロジェクトであることが推奨されております。

その理由を考えて見ますと単年度制が推奨されておりますことは奉仕活動に対するロータリアン本来の

考え方に根ざしたものであるのではないかと思うのであります。

社会奉仕に関する1923年の声明に「ロータリー・クラブでの社会奉仕活動はロータリー・クラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられたいわば研究室の実験としてのみこれを見るべきである…」と謳われております。

ロータリー・クラブの奉仕活動の目的はロータリアンを教育するための教科書として考えるべきものであるからであります。そこによく言われますようにロータリーは本来奉仕活動を行うためではなく、奉仕を實踐できる人間を育てる事にあるといわれている所以があるのであります。クラブにおける奉仕活動が会員に奉仕の理想を勉強する場であるとするならば、奉仕活動の単年度主義を採らねばならないとされている本来の趣旨は毎年同じロータリアンと同じ教科書を使うことは好ましいことではないという理由によるものではないかと思うのであります。

このようにロータリーは、人事の面においても、奉仕プロジェクトの推進においても単年度制を重視してきたのでありますが、ロータリーを取り巻く環境の複雑化、組織の肥大化も相まって、単年度制をとることにより継続性が欠如しているというロータリーの弱点が近年になって表面化してきたのであります。さらにRIが取り組む奉仕プロジェクトが、ポリオ撲滅に代表されるように巨大化してきたことによって、さらに単年度制の欠点が非常に目につくものになってきたのであります。

従いましてロータリーの人事、奉仕プロジェクトの単年度制のメリットを生かしつつも、ロータリー哲学の継続性を維持し、しかも複雑かつ変化の激しい現在の環境に適応していける組織として存在し続けるためにはどのような方法が可能でありましょうか？

(4) 長期的視点の導入の必要性

①国際ロータリー長期計画委員会

そのような会員の混乱、不満、批判に対処するためか、国際ロータリーの委員会といたしまして長期計画委員会が設立されました。この委員会はロータリーで10年50年100年後を目標とした最も重要な委員会であるということでありまして、将来RIの組織の運営及びプログラムを一層効果的に改善する為7つの長期企画目標を設定したということでありまして、

その7つの戦略目標とは下記のとおりであります。
ポリオの撲滅

プログラムの重点分野の明確化
新規組織のプログラムの重点的選定
全世界的会員増強と一体化
全般的管理及び指導構成の改善
全てのレベルに於ける研修活動と教育の改善
公共イメージを高める

7つの戦略目標の中身については色々異論があるところではあると思いますが、国際ロータリーが長期的なヴィジョンを作る努力を始めたこと、単年度制の弱点を克服すべく、長期的な計画の策定に動き始めたことは評価すべきことであると考えております。

②クラブ長期計画策定の必要性

昨年、今年の国際協議会におきましても、各ガバナ・エレクトに対し地区とクラブに対し「長期計画」の策定推進を推奨するようにとの話がありました。これも人事やプロジェクトの単年度制の弱点を補い、つぎの100年の飛躍に向けてロータリー哲学の一貫性を維持し、長期的発展に資するということが目的であると考えられます。

a. クラブ長期計画を作成の効用

クラブは長期計画を作成することによって

I) 時代の要請に即したクラブの存在意義や使命を掘り下げ考え直す機会を得る

II) ロータリーにおける人事の単年度制による弊害を取り除き、必要なロータリー哲学の継続性を担保する。

III) それぞれのクラブの特徴や特殊性を生かす活動を目指すことができる。

といった効果が期待をされます。

長期計画策定によって、今ほとんどのクラブが抱えているような弱点を克服し新しい時代に相応しい理念と奉仕活動のヴィジョンをもったクラブへとして発展の糸口をつかむことができるのであります。

b. クラブ長期計画策定の要素

長期計画を作成するため少なくとも次の諸点が考えられなければなりません。

(a) クラブのミッション・ステートメント

(b) ミッション・ステートメント実現のための奉仕活動目標の設定

(c) 奉仕活動目標達成のための活動方法

(d) 奉仕活動目標達成のための会員増強計画・資金計画・ロータリー情報教育プログラム

直前会長・現会長・会長エレクトを中心にこのような要素を含んだ長期計画を作成し、毎年そのレビュー

をし、状況の変化に対応した計画として引継いでいく事が奨励されております。

私はロータリーにおける長期計画の考え方をすすめることによって、個々のロータリー・クラブが低迷から脱しロータリーの新しい100年の発展の糸口をつかむことが可能になるのではないかと考えております。

このように長期計画の策定は現在のクラブが抱えている弱点克服のために大変有効であると考えられます。

(5) 私の考えるこれからのロータリー

ロータリーのこれからを考える上で私として重要と考えるいくつかの点について述べさせていただきましたが、さらに具体的に「これからのロータリー」として持つべきビジョンについてお話をいたしたいと思います。

①国際奉仕の変遷

「私の考えるこれからのロータリー」ということの最後に国際奉仕についてお話をさせていただきたいと思っております。それは国際奉仕の変遷が現在のロータリーをある意味において非常に変質させ、今日のロータリーの姿というものに大きな影響を与えていると考えることが出来るからであります。

②国際奉仕と世界社会奉仕

先ず国際奉仕と世界社会奉仕の違いというところからお話させていただきたいと思っております。それはこの二つの言葉の違いの中にロータリーに対する二つの大きな考え方の潮流とも言うべきものが存在しているからであります。

初期のロータリーの思考の中には国際奉仕という概念はありませんでした。国際奉仕の概念がロータリーで生み出されましたのは第一次世界大戦の影響が大きいと考えられます。このような大戦を経験して世界中のロータリアンが親睦を通じて世界の平和を保つことができないだろうかという発想が生まれました。

1921年、スコットランドのエジンバラで国際大会が開催されたのですが、これはアメリカ本土外での初めての国際大会でありました。それを記念して、「奉仕の理想に結ばれた、事業と専門業務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること」という国際奉仕に関する声明が発表されました。

翌1922年に開かれたロスアンゼルス大会において、当時のロータリーの綱領として正式承認を受け現在に至っています。ロータリーの綱領第四項には国際奉仕の理念が「奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。」と定義されております。この定義によれば国際奉仕とは、「国家という枠組みを越えて、ロータリアン同士が友情を結び、国際理解、親善、平和を推進すること。」ということになります。

ここで注目すべきは国際奉仕の対象となるのは、国際一般ではなくあくまでも他の国のロータリアンがその対象であるということでありまして。従いまして綱領の字義通り解釈いたしますと、いわば正しい国際奉仕というものは「国際青少年交換」「ロータリー友情交換」「国際親善奨学生制度」「趣味職業別親睦活動」「姉妹クラブ」「ロータリアンによる個人レベルやクラブレベルの交流」ということになります。

③世界社会奉仕の創設

これに対して世界社会奉仕の考え方は比較的最近になって導入されたものであります。1962年にニッティシ・ラハリーという当時のインド出身のRI会長によって提唱されたということでありまして。国際奉仕がロータリアン間の国際理解、親善、平和への努力というような、より精神的な側面を謳っているのに対し、世界社会奉仕は、国際的な資金的、物的、また人的な援助という面を強調しており、元来の国際奉仕の考え方からすると、国際奉仕の分野であるというよりもその名の示すとおり社会奉仕の一環でありそれが国境を越えたものであるということができると思っております。

④最大の世界社会奉仕=ポリオ・プラス

たとえば世界社会奉仕の面で現在ロータリーが行っている最も大きなプロジェクトはポリオ・プラスの事業であります。

ポリオ・プラスのプロジェクトは1985年に始められたものであります。ロータリー創立100周年でのポリオ撲滅宣言を目指して、他の国際機関との密接なる連携の下にその実現に向かっての努力がなされております。「ロータリーがポリオ・プラス・プログラムを開始して以来、ポリオ発生国の数は、1985年の125カ国以上から6カ国に減少しました。さらにポリオ症例数は1985年から99%以上も減少しま

した。」という国際ポリオ・プラス委員会の声明を見ましても明らかな通りであります。

その実現のために1985年以降2005年までにロータリーが集めることになる寄付の総額は5億ドル（現在レートで540億円）と考えられており、また延100万人以上のロータリアンがポリオ・プラスのプロジェクトに実際に参画してきたということになるといわれております。

このような結果を得ることができたことは確かにすばらしいことでありますし、ロータリーが100周年を迎えるにあたって成し遂げるべき事業としてまことに相応しいものであるとは思いますが。

しかしその反面においてロータリーがこのようなプロジェクトに乗り出したことによってロータリー自体がその性格を変えることを余儀なくされていったことも事実であります。このような巨大なプロジェクトに取り組むためには会員を増やし、寄付を募る基盤というものを常に大きくし続けていかなければならないのであります。本来のロータリーは「奉仕の理想」を学びそれを自らの事業や専門職に反映し、自らも成長していくことを目指すための団体であったはずでありました。しかし現在のように人集め、お金の集めのために奔走しなければならないロータリーになってしまった原因を探ってみると、国際ロータリーが中心となってこのような非常にお金を必要とし、人数を必要とするプロジェクトが進められているというところにあるということができないのではないかと思います。

国際奉仕と世界社会奉仕との違いということに関して大阪のバスターガバナー（365地区）である直木太郎氏は「世界社会奉仕は、他国の飢餓問題とか貧乏の問題とかその他いろいろな困った問題を解決するものだけのものであって、ロータリーの言う国際奉仕の実践ではない。ロータリーの言う国際奉仕とは個人同士の付き合いで世界平和を達成するものだ。」と述べています。さらに「世界社会奉仕は国際問題の解決には役立つが、ロータリーの綱領に基づいた国際奉仕とは言えない。これは国家が考える問題であって、ロータリーがこれに安易に取り組みれば、将来に禍根を残す恐れがある。」ということも言っております。

これに対しては当然「世界社会奉仕は結果的に世界平和に繋がるから、国際奉仕である。」という反論がなされたのであります。現在のロータリーの状況を見ますと、直木バスター・ガバナーが述べて

いるような考え方も、よく考えてみる必要が出てきているのではないかと思います。

そのようなポリオ・プラス・プロジェクトでありますから、私は個人的には、ここまで来たのでありますから、これは100年に向かって何とか成功裏に終わることができるよう、最後の仕上げの努力に協力をしていかなければならないとは考えられます。

しかしポリオ・プラスが終結した段階において、次に進むに当たっては、もう一度ロータリーの国際奉仕の理念とはいかなるものかを考え直すことが必要ではないかと考えております。例えばもっと緊急を要するエイズのような問題に取り組むべきであるという意見もロータリアンの中にはあるのですが、もしそのようなことを推し進めていけばロータリーはさらに巨大な資金と会員集めに奔走せざるを得なくなってしまうのではないかと危惧するのであります。

⑤ロータリー・センター

従いまして私は、ポリオ・プラスの次に国際ロータリーとして最重要プロジェクトとして考えられなければならないのは、世界平和奨学生プロジェクトのようなものであるべきであると考えてるのであります。

ロータリアンは長い間世界理解と平和というロータリーの使命を推進するためにロータリー大学の創設を考えてまいりました。そのため1996年に、元RI会長で当時の財団管理委員会委員長のラジェンドラ・サブー氏の指導の下に、ロータリー創始者ポール・ハリスの没後50周年にちなみ、ロータリー大学の構想を審議する委員会が設置されました。

しかし大学創設は資金的、人材的困難があまりに大きすぎるということで、国際問題研究のためのポール・ハリス・センターを世界各地に創設しようという勧告が出されました。1999年に、管理委員会は、8つの大学と提携する計画を承認しました。

2000年10月の管理委員会決定により、このプログラムはポール・ハリスに敬意を表すものではあるが、ロータリー世界以外でのポール・ハリスの知名度が低いため、「紛争の解決と平和における国際問題研究のためのロータリー・センター」（長い名称ですので、通常ロータリー・センターと略しています）と名称を変えました。

2002～03年度に世界平和奨学金プログラムが発足し、69名の世界平和奨学生第一期生が選ばれ、うち

7名が国際基督教大学で勉学しています。さらに2003-04年度には68名の世界平和奨学生第二期生が選ばれ、そのうち7名が国際基督教大学で勉学を開始いたしております。

このプロジェクトは先ほどの国際奉仕か世界社会奉仕かという区別からするとロータリーの本来的な「国際奉仕」に相当するプロジェクトであるということがいえるかと思います。このプロジェクトの実態をつぶさに見てみますとまだまだ開始間もないということもあり大変問題が多いことも事実であります。日本発の平和の考え方、日本のロータリアンの平和に対する熱意が反映されるような制度にしていくことが是非とも必要であると思っておりますので、皆さんにもより大きな関心を持ってこのプロジェクトの成功をサポートしていただきたいと考えております。

⑥教育奉仕への「集中と選択」

このように国際奉仕一つを例にとりましても、将来のロータリーの選択にとって大きな幅のある問題が存在するのであります。

私は今ロータリーが100周年を迎えロータリーにとってなすべき多くのことの中で最も重要なことは、「集中と選択」ということであると考えます。一般の企業においてもどのような業種に集中選択していくかが将来の方向性を決定していく上で最も大切な経営の決断であることは言を待たないことであります。

ロータリーの100周年にあたり、過去のロータリーが成し遂げてきた数々の立派な業績を基盤として、これからのロータリーとしていかなる方向に向かうべきかについて、「集中と選択」を模索することこそ、大切なことではないかと思うのであります。「集中と選択」によってのみ本来のロータリーの姿を明らかにし、それをこれからの時代に適合する組織にしていくということが可能となるからであります。

そのような「集中と選択」の観点から「私の考えるこれからのロータリー」のあるべき姿を検討してみたいと思うのであります。

先に申し上げましたように、ロータリーは本来職業奉仕団体であり、先ず何を差し置いても、「自分の職業を倫理的、道徳的に高いものにしていくために奉仕の理想を学び、実践し、それを世の中に広めていくことにある。」という目的を持った職業奉仕団体であるということを基本におかなければならないと考えます。

したがってロータリーの本質は、「自分に対する

教育」ということであると言い換えても間違いではないと思えます。

国際奉仕の変遷の中で申し上げましたように、ロータリーは政府や国際機関が取り組むような大きなプロジェクトに取り組むことは組織のひずみを生みロータリーの本来の姿を危ういものにいたしております。国際奉仕の本来の姿は、国際青少年交換、ロータリー友情交換、国際親善奨学生制度、趣味職業別親睦活動、世界平和奨学生のプログラムに見られるように、「奉仕の理想に結ばれた事業と専門職に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。」即ちこれも国際教育に深く関連しているといえるのであります。

そのように考えて見ますと、ロータリーの重要な部分が「教育」ということで占められているということが出来ます。

そこで私はロータリーの四大奉仕全てに教育ということをつけ加えそれをロータリーの目的としてはどうかという考えを持っております。

「クラブ教育奉仕」

「社会教育奉仕」

「職業教育奉仕」

「国際教育奉仕」

ロータリーを国際的なネットワークを持った「職業教育奉仕」を基盤とした教育団体であると定義し直し、様々な職業、および専門職の人々があらゆる意味における教育を通じて世界の進歩のために奉仕をしていく団体として考えることが出来るとすれば、ロータリーが21世紀においてさらにその存在価値を高めるのではないかと考える次第であります。